

いては、周辺が植林等で変形され、また、遺物の出土したことも聞き及んでいないので、今日では明らかにし得ない。

ロ。湖北地方における古式須恵器（図7）

鉛練古墳出土の須恵器類は、陶邑古窯跡や森氏のいうⅠ期に相当するものであり、「器形の交代や形態の変化がみとめられるだけでなく、須恵器の量産化を暗示する技術上の変化があらわれ^⑭る」前段階のものである。ここでは、これらを古式須恵器とし、後に考察をすすめるために、湖北地方における出土例を紹介しておく。湖北地方で知見に触れたものは次のとおりである。

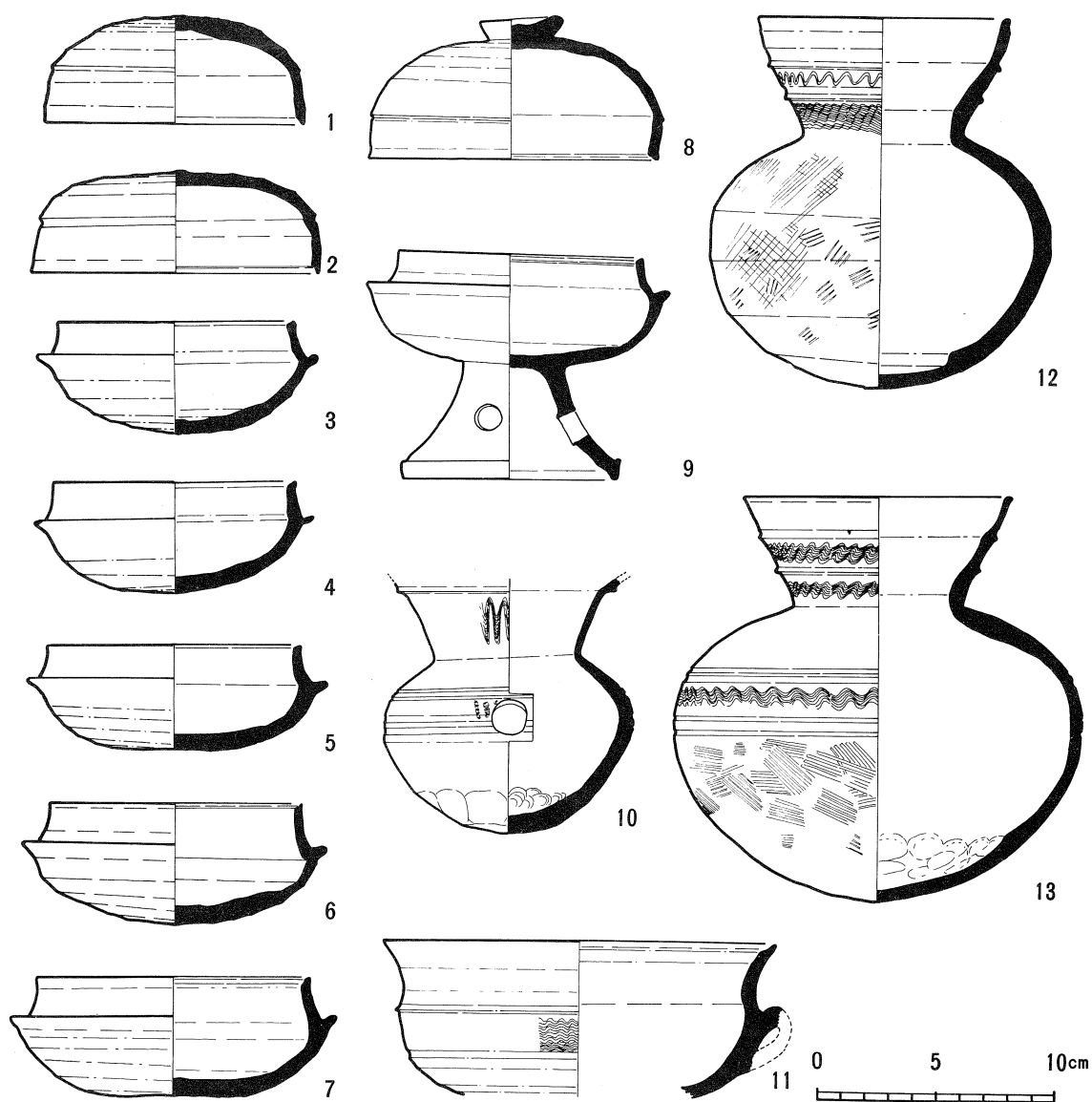


図7 湖北地方出土古式須恵器実測図

（上ノ山7号墳2、6、黒田永山4号墳13、難波遺跡11、伝茶臼山古墳出土7～10、入江内湖遺跡1、3～5、12）

- ①余呉町中之郷鉛練古墳（図6参照）
- ②余呉町坂口上ノ山7号墳（2、6）^⑮
- ③余呉町坂口黒田永山4号墳第2主体部（13）^⑯
- ④浅井町湯田雲雀山2号墳^⑰
- ⑤びわ町難波・新居難波遺跡（11）^⑱
- ⑥長浜市垣籠伝茶臼山古墳出土（7～10）
- ⑦近江町能登勢山津照神社古墳^⑲
- ⑧米原町磯入江内湖遺跡（1、3、4、5、12）

①鉛練古墳 本報告参照

②上ノ山7号墳 上ノ山古墳群は、舌状台地の先端を取り囲むように、7基の円墳から構成されたものである。このうち、群の南端を占める1～3号墳は、内部主体に横穴式石室を持つことが明らかで、1・3号墳が6世紀末葉、2号墳が7世紀前葉のものと考えられている。7号墳は群中最北端に位置していたが、すでに、開墾により消滅している。開墾時に須恵器杯身1点、蓋2点、直刀らしい鉄製品が出土したと伝え、また、その折に石材の出土を見なかったとのことである。従って、7号墳は木棺の直葬墳であった可能性が強い。7号墳出土の杯身は、口縁部径10.7cm、器高5.2cmで比較的小型である。形態は、やや内傾気味であるが長い立ち上りを持ち、端部は内側に傾斜させて段を持つ。受部はやや上方に短かくのび、端部は丸く仕上げている。底部は丸味があり、その外面3分の2程を篋削りしている。蓋はこの身とセットをなすもので、口縁部径12.1cm、器高4.3cmを計り、天井部はやや扁平である。天井部と口縁部を分ける稜の突出は小さい。口縁端部は段を持つ。これらは、規模、形態とも鉛練古墳出土品に非常に良く近似している。

③黒田永山4号墳第2主体部 黒田永山古墳群は丘陵尾根上に立地し、10基の円墳からなる。主体部はいずれも明瞭でないが、横穴式石室以外のものが考えられる。10基中4号墳の発掘調査が実施され、墳頂部で、箱式の木棺を直葬した二つの主体部が検出された。これは、南北二列に並置されたもので、須恵器類を出土したのは南側の第2主体部である、第2主体部からは、短甲1、鉄刀2、鏃一括が棺内から出土し、須恵器壺1、土師器高杯1が棺蓋上面に当る部分より出土している。須恵器壺は直口型のもので、口縁部外面に二条の突帯、各突帯の下方に波状文がめぐらされている。体部はやや扁平で、最大径はやや上方にある。体部中程と2cm程上方に2条一对の凹線が二段に施され、その間に波状文がめぐらされている。鉛練古墳からこの種の土器の出土を見ていないが、突帯、凹線、波状文等による施文に、大型器台との類似点がみられる。また、陶邑古窯跡群TK23に、口縁部の破片であるが類品があり、和歌山県陵山古墳出土の穀塚式の直口壺が、体部の波状文を欠くだけで、当古墳出土のものに非常に良く似ている。このことから、黒田永山4号墳第2主体部出土の直口壺は、鉛練古墳出土の須恵器類よりやや古式といえる。

④雲雀山2号墳 小谷城を築いた小谷山の南方の南北長450m程の独立小丘上に形成されたものが雲雀山古墳群で、8基の円墳より構成されている。このうち、最高所にある1号墳と北側へつらなる2・3号の3墳の発掘調査が実施されている。1号墳は径19～21mの円墳であるが、墳頂部で石組を施した特殊遺構が検出され、発祀遺跡ではないかと推定されている。鉄剣形鉄器、土師器高杯が出土し、4世紀後半～5世紀中頃^{②①}のものとされている。2号墳は径16～17mの円墳で、「側壁の特殊機能を、簡略化した最小限の構造」を持つ竪穴式石室が検出されている。石室は長さ3.4m、幅1.2m余で、粘土床を持っている。当墳からは、石室内より、変形獣文鏡1、勾玉2、丸玉114、小玉18、三輪玉数個、櫛数個、鉄刀2、鉄剣3、鉄鉾1、鉄鏃2括、刀子1、鉄鎌1、短甲1が出土するとともに、須恵器、土師器が石室床面上方30～50cmの所より、散乱した状態であるが、一括出土している。須恵器は有蓋高杯数個、埴1、埴片Ⅰ類2、Ⅱ類20余個、土師器は埴1である。3号墳は径11～12mの円墳で、内部主体は「石塊を以って鉤形の区画としての側壁を作っただけの極めて簡単なもの^{②②}」で、変形獣文鏡1、鉄剣1、鉄鏃1括、須恵器埴1が出土している。年代的には2号墳に近い時期が考えられている。なお、2号墳出土の有蓋高杯は鉛練古墳に近似したものである。

⑤難波遺跡 当遺跡は、昭和49年度は場整備事業大郷工区において、排水路掘穿の際に多量の遺物の出土を見たことによって発見されたものである。発見当時、工事はすでに完了に近く、遺物の包含の仕方、遺構の有無等、遺跡の性格については明確にできなかったが、採集した遺物には、古墳時代から平安時代にかけての土師器、須恵器、土製馬形品、木製品等がある。また、これら採集品の中に、須恵器の無蓋高杯の杯部の破片があり、当遺跡採集品で唯一の古式須恵器と考えられた。この無蓋高杯は、口縁部が外反し、端部は内傾した面を取り、やや凹む。口縁部と体部との境界は明瞭な凸帯で区別され、さらに体部も一条の凹線で上下に区別され、上部は波状文を施した文様帯となっている。この文様部に環状の把手がつく。杯底部の外は篋削りしている。このような特徴を持つ無蓋高杯は、陶邑古窯跡群TK208に類品があり、先述の古墳出土品のみならず、湖北地方では、現在のところ、最古式の須恵器である。

⑥伝茶臼山古墳出土 県下最大の前方後円墳である茶臼山古墳附近から出土したと伝える土器類が長浜市立北郷里小学校に保管されている。保管品は、須恵器杯身1、有蓋高杯2、蓋1、罍1、提瓶1、平瓶1、高台付埴1、土師器高杯1で、高台は埴を除く他はすべて古墳時代のものである。古墳時代遺物で、提瓶は、湖北地方後期古墳の編年^{②③}で黄牛塚古墳期、平瓶は上ノ山1号墳期に当り、いわゆる古式須恵器は、杯、有蓋高杯、罍である。杯身は、口縁部径11.5cm、高さ5cmを計る。口縁部はやや内傾していて、端部に内傾した面を取る。受部は、短かく斜上方にのび、端部は丸い、底部はやや丸味があり、外面の篋削りは3分の2に及ぶ。有蓋高杯は、口縁部が内凹気味に立ち上り、その端部は平坦な面を取るものと丸くおさめるものとがある。受部はと

もに短かく、斜上方に突出する。脚部は内沓して開き、端部を上下に肥厚させている。又、脚部には3個の円形の透しが施されている。規模は、杯部の口縁部径10.3cmと10.6cm、器高9.6cm、杯部の深さ4.7cmと4.6cmを計る。蓋は、中央が凹むツマミが付く。口縁部径12.1cm、ツマミまでの高さ6cmを計る。口縁端部は面を取り、天井部との境界は小さい突帯で区別されている。又、口縁部は器高に対して短い。天井部は丸くふくらみ、外面を2分の1程篋削りしている。天井部は口径に比べて高い。竅は口縁部が欠矢している。体部は最大径が中央より上方にあり、二条一対の凹線文がめぐらされ、その間に刺突文が施されている。円孔は刺突文帯部に穿たれている。口頸部は直線的に、短かく開き、段をつくって口縁部に移行している。口頸部には縦長の波状文が施されている。以上の古式須恵器は、杯身が小型の段階であり、蓋は、口縁部と天井部との境界が甘く、口径に対して器高が高い。有蓋高杯はまだ短脚であり、竅は口頸部が短かく、体部もやや扁平である。これらの特徴は、杯身、有蓋高杯、蓋等鉛練古墳出土のものに比べ、やや新しく、蓋では陶邑古窯跡群のTK47、有蓋高杯、竅では陽徳寺式等に近似している。

なお、これら伝茶臼山古墳の出土品は茶臼山古墳より出土したと伝えるが、茶臼山古墳の墳形、立地よりして、これら須恵器類より年代的にさかのぼるものである。茶臼山古墳附近には、桧山古墳群があって、一部横穴式石室の露頭しているものがある。伝茶臼山古墳出土の須恵器類に6世紀末葉まで下るものが混在しており、その時期的なばらつきがあることから、むしろ、この桧山古墳群中の出土遺物ではないかと考えられる。

⑦山津照神社古墳 南面する前方後円墳で、横穴式石室を持つ。石室は、全長7.5m、玄室の長さ4.5m、幅2.7m、羨道幅0.9mの規模で、内部に石棺を持つという。出土品は銅鏡3、金銅製装具残欠3、水晶製三輪玉5、鹿角製柄鉄刀子残欠2、刀身残欠若干、鉄塊若干、鞍橋覆輪残欠2、鉄製輪鎧片輪、鉄製轡1、鉄地金銅張杏葉2、同雲珠残欠4、鉄製鉸具1、須恵器大型器台2、壺2、提瓶1、台付長頸壺1、杯身2、埴輪片多量である。これら副葬品のうち、杯身1点のみに、いわゆる古式須恵器がみられるのである。しかし、横穴式石室の平面形は、玄室が4.5×2.7mであり、羨道長3mと湖北地方においては、最古式と考えられる四郷崎古墳より後出であり、磯崎2号墳あるいは中山古墳頃の形態を持っている。また、共伴される須恵器類はすべて6世紀前半頃のものである。従って、古式須恵器である杯身1点は、あるいは、他からの混入品である可能性がある。

⑧入江内湖遺跡 旧入江内湖の湖岸から湖底にかけて、そのほぼ全域から遺物の出土を見る遺跡である。特に、磯西野区附近からは縄文時代以降の多量の土器類、木製品等の遺物の出土を見ている。その中で、地元磯崎文五郎氏の保管になるものに、古式須恵器が数点見受けられる。器種は杯身3、蓋1、直口壺1である。杯身は口縁部径10.0～10.6cm、器高4.5～4.7cmとほぼ同規模である。形態も、いずれも口縁部は内沓気味で内傾し、端部は内側に傾斜した面を取る。受部

は短かく、斜上方に突出し、端部は丸い。底部は丸味があり、外面は2分の1～3分の2程篋削りしている。蓋は口縁部径10.9cm、高さ4.5cmで、身のいずれともセットを組むことができる。口縁端部は面を取っていて、尖り気味に終る。天井部との境界の稜は甘く、天井部は丸くふくらむ。直口壺は、口縁部が内側にカーブして開き、端部は丸く終る。口縁外面に2条の凸帯をめぐらせ、頸部までの間に2本の波状文による文様帯をつくっている。体部は最大径を中程にとり、やや扁平であるが球体に近くなっている。施文はなく、櫛状品によるカキ目状の調整痕がみられ、底部を篋削りしている。これらのうち、杯身、蓋は鉛練古墳や上ノ山7号墳等の出土品に近似した特徴を持つ。また、直口壺では、口縁端部が丸く終り、口縁部の施文がやや粗雑になり、体部の施文が省略されている。さらに、体部が球体に近くなっている等、黒田永山4号墳のものに比べて、やや退化した状況にある。

以上、知見に触れた範囲であるが、湖北地方内で8遺跡からの古式須恵器の出土を見ている。このうち、鉛練・上ノ山7号・黒田永山4号・雲雀山2号・3号・伝茶臼山・山津照神社の7古墳の出土品では、黒田永山4号墳、雲雀山2号墳が他よりやや古式といえよう。また、入江内湖遺跡出土品は鉛練古墳等に近く、難波遺跡出土品は、現在のところ、湖北地方で最古式のものと考えている。

ハ. 湖北地方における後期群集墳の発生とその形成の諸段階

前項で明らかなように、湖北地方地において古式須恵器を出土する古墳は鉛練・上ノ山7号・黒田永山4号・雲雀山2号・3号・伝茶臼山古墳出土、出津照神社古墳の7古墳である。このうち、出土地の明瞭でない伝茶臼山古墳出土と出土品のセット関係で疑問の持たれる山津照神社古墳の2ヵ所を除くと、次のような共通点が見出せる。すなわち、

①上ノ山7号墳、黒田永山4号墳及び鉛練古墳は木棺直葬、雲雀山2号墳が「簡略化した最小限の構造」を持つ竪穴式石室、同3号墳が「区画としての側壁を作っただけの極めて簡単な」構造を持つものであり、いずれも横穴式石室を内部主体として持たない。

②鉛練古墳、上ノ山7号墳、黒田永山4号墳、雲雀山2号墳、同3号墳には共通して武具あるいは武器の副葬品が見られ、表3で明らかなように、横穴式石室墳で多く認められる馬具類の副葬がない。

③黒田永山4号墳、雲雀山2号墳及び鉛練古墳では、須恵器、土師器等土器類は、棺内ではなく、棺蓋上方等棺外に副葬されている。等の点である。湖北地方において、最古式と考えられる須恵器は難波遺跡のものである。須恵器が古墳に副葬されるのは、現在のところ、黒田永山4号墳あるいは雲雀山2号墳の段階であって、形式的には1～2形式下る。さらに、須恵器が横穴式石室に副葬されるのは、上ノ山7号墳等より1形式下る湖北町郡上四郷崎古墳からである。出土土器類のうち最古式のⅠ類は、たとえば杯身を見ると、口縁部径12.4cmと大型化しており、高杯にお